

令和4年度 北海道教育大学函館校国際地域学科地域政策グループ
編入学試験小論文問題

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 この問題冊子は、白紙1枚と問題本文2ページ、解答用紙は1枚（裏表）、下書き用紙は2枚あります。
- 3 「問1」「問2」すべてに回答すること。
- 4 解答は解答用紙に横書きとし、句読点および段落の空白も1文字とし、指定された字数内でまとめること。ただし、題・氏名は記入しないこと。
- 5 受験番号は、解答用紙の指定欄に記入すること。
- 6 解答用紙1枚を提出し、問題冊子・下書き用紙は、試験終了後持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外は受理しません。
- 7 試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

【問題】

次の問題文を読んで、後の問に答えなさい。(合計 100 点)

「伝統の発明 — 近代社会における伝統の役割を捉え直す」

私たちの「伝統」

年中行事、伝統芸能、民族衣装、生活習慣など、私たちの社会には、多くの「伝統」がいまも生きている。これらの伝統は、それぞれが地域や社会での固有の歴史と長い時間を共にしてきた慣習や儀礼から成り立っている。それは、私たちが生まれるはるか以前から地域や社会の構成員により継承されてきたという歴史性によって保証されている。私たちはこうした伝統を、自己の出自の起源や文化的アイデンティティのよりどころとして参照することがたびたびある。社会学者エミール・デュルケームの宗教研究が示すように、伝統は、儀礼（集団で共に行う行動様式）と象徴（その集団が共通の意味を付与した、目に見えてふれることのできる道具）という、いわば社会を構築するために必要な条件を備えている。グローバル化が世界中の地域社会の変化や文化の流動性を加速させる現代、伝統は私たちが何者であるのかという不安を大いに解消してくれるといえよう。

しかし、自分たちの伝統やその文化について考えをめぐらすとき、その「起源」についてのどのくらいさかのぼって考えてみたことがあるだろうか？ 一見すると伝統は今も昔も変わらない普遍的性質によって特徴づけられるとすれば、私たちはその普遍性をどこまで検証したことがあるのだろうか。あるいは、伝統文化を自分自身の文化的アイデンティティや集合的アイデンティティの重要な根拠として参照するとき、現代社会に生きる私たちを取り巻くどのような社会的状況が明らかになってくるのだろうか。この章では、こうした点について「伝統の発明」という視点から考える。

伝統的社会から近代社会へ

かつて、私たちにとって社会的集団とは地域固有の伝統文化によって連帯した集団であった。初期の人類学におけるさまざまな研究成果は、「未開」の社会が歴史的にも地理的にも明確に区分する文化において、個々の社会が比較的安定的に統合されながら存続してきたとみなしてきた。その内部には異なる階層集団が独自の文化や伝統を規範とする文化的多様性もあったのだが、その厳格な階層構造によりそれぞれの階層を超えた人間関係が成立する余地は少なかったといえよう。

しかし、私たちが現在生きている近代社会では、人間集団のあり方が大きく変容しつつある。19世紀のドイツの社会学者フェルディナント・テンニースは、著書『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』にて、家族や友人など地域に基づく相互扶助を中心とした共同体（ゲマインシャフト, *Gemeinschaft*）と、それぞれの専門職業集団の分業と協働で構成される社会（ゲゼルシャフト, *Gesellschaft*）という2つの連帯のあり方を概念化し、伝統社会か

ら近代社会への変化を説明した。近代社会への移行にともない、社会集団は伝統的な文化の枠組みを超えたところで成立する。だが、その集団の帰属や連帯の根拠として、従来の共同社会で共有することのできた伝統や文化に依拠することはできない。近代社会において従来の社会的枠組みから解放されたさまざまな個人を統合するための文化的な規範や価値観は、ますます重要な意味を帯びるようになった。

実は、社会学や人類学はこうした近代の社会的変化を背景に成立している。デュルケームは、近代社会における人間の連帯の問題に取り組んだ『自殺論』のなかで、彼が「アノミー(anomie)」と呼ぶ状態、つまり個人が直面する自身の意味の喪失を概念化した。その結果他者との社会的な連帯(かかわり方)の欠如がもたらす混乱が、個人を自殺という暴力的な結末に追いやるリスクを上昇させることがあると論じた。伝統はかつて一人ひとりを明確な規範で集団に結びつけることができていた。特定の価値観を共有し、そして共通の歴史を有することができる集団では、自己の起源や帰属が明確になり、性別や階層によりお互いが異なる役割をもちつつも集団的には安定した構造が維持された。しかし、①近代社会はこうした共通の伝統文化を超えたところに成立する集団なのである。そこに、私たちが自己の帰属や連帯について抱える根源的なジレンマが潜んでいる。

出典：濱野健(2017)「伝統の発明 — 近代社会における伝統の役割を捉えなおす」,長友淳編『グローバル化時代の文化・社会を学ぶ — 文化人類学/社会学の新しい基礎教養』2017年,世界思想社., p.81-88.

問題1 上記の文章を400字程度で要約しなさい。(配点40点)

問題2 下線部①について、「共通の伝統文化を超えたところに成立する集団」の具体例をあげ、その集団に潜んでいる自己の帰属や連帯に関する根源的なジレンマとは何かを800字から1000字で述べなさい。なお、解答にあたっては、従来の共同社会で共有することのできた伝統や文化とはどのようなもので、具体例としてあげた集団が帰属や連帯の根拠としてそれに依拠できない社会的背景についても言及すること。

(配点60点)